

4. 1848.T次調査報告

遺跡名	武蔵国府関連遺跡
グリッド	M100-2次, M90-7次, N81-4次
所在地	東京都府中市日吉町5番地先
現地調査期間	令和2年5月12日～令和2年5月18日
面積	106.5㎡
検出土量	コンテナ1箱
検出遺構	水田層(M100-SX77, M90-SX48, N81-SX26) [近世]
調査担当者	野田憲一郎

1 調査地区の概要

府中市日吉町5番地先、東京競馬場の北側市道で行われた街路灯新設工事に伴う確認調査である。当該地は、東京競馬場北側を東西に走る「競馬場通り」上で、施工箇所は、東京競馬場第四駐車場南東側の道路敷で、全長106.5m×幅1mのトレンチ調査となった。調査は、配管工事の掘削に合わせて遺構検出と壁面土層の断面図を約10m置きに記録した。調査期間は、令和2年5月12日から18日までで、1日約15m間隔で7回の調査を行った。

当調査地区の立地は、府中崖線下の沖積低地に立地する。遺跡は『武蔵国府関連遺跡』の国府地域南方に当たる。周辺では西側を縦走する都市計画道路3・4・22号線（府中街道）拡幅に伴う調査（1166.T2次 東京都埋蔵文化財センター調査報告第140号）、東側では東京競馬場スタンド改築に伴う発掘調査（1088次）が行われており、1166.T2次調査では、近世以降と考えられる旧水田の耕作土から縄文土器・須恵器・土師器の他、近世以降の陶磁器類が出土している。1088次調査では東京競馬場スタンド北西側で、6世紀前半から7世紀前半の古墳時代集落跡や国府終末期の10世紀後半から11世紀代に定着的な集落が沖積低地に展開したことが明らかとなっている。

加えて当該地は、元文3（1738）年の大國魂神社領地古図（第1848.T-2図）によると、妙光院境内東側に当たる御供田の位置に当たる。大國魂神社の御供田は、天保5（1834）年に刊行された江戸名所図会『府中六所宮田植』の挿絵に描かれているとおり、五月六日に行われる御田植の神事が行われた場所であり、この日には、武蔵国中の住人が各々に早苗を持ち寄り、豊作



※『東京競馬倶楽部府中競馬場平面図』（府中市歴上の森博物館収蔵）に加筆の上トレースした

第1848.T-1図 調査区の位置と東京競馬場施工前の照合図

4.1848.T次調査報告

祈願の田植を行ったとされている。この御供田は、昭和8(1933)年の東京競馬場竣工により消滅し、東京競馬場の駐車場及び競馬場通りとなっている。

2 基本層序

地中管路工事の掘削深度まで掘り下げた。掘削の深さは、現状道路舗装面をGL±0とし、GL-100cm～120cmまでを掘削した。土層断面図はA～Eの5地点を掲載した(第1848.T-6図)。

現地表面下約50cmまでは、現状道路の舗装と旧表土である。それより下層において旧水田の泥土層と床土層が検出された。旧水田の床土層より下は、灰黄褐色を呈する砂質粘土層および砂礫層に達する。

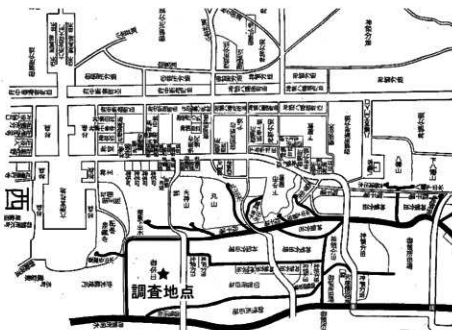
- 1層 現状道路の舗装及び旧表土層。厚さ50cm
- 2層 灰褐色土 旧水田の泥土層 層厚約8～20cm。
- 3層 黄褐色土 旧水田の床土層 層厚は5～20cm。
- 4層 灰黄褐色土 砂質粘土層 層厚は20～30cm。中世以前の遺構検出面。
- 5層 砂礫層

3 まとめ

街路灯設置範囲全長102mに亘って、遺構・遺物の検出作業を行ったが、遺構は確認されなかった。現況GL-50～70cmで灰褐色の水田層、その下に黄褐色の水田床土を確認した。その水田泥土層の中から土師質土器(カワラケ)、近世の青磁片及び灯明皿が出土したことから、近世以降の旧水田であると考えられる。この旧水田は、大國魂神社領地古図にみられる御供田の一角であると考えられる。

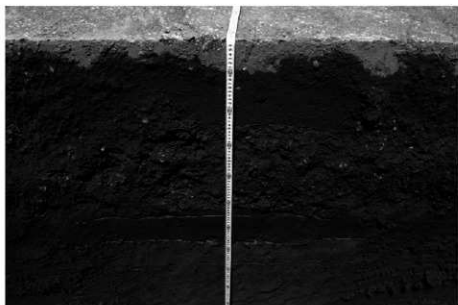
水田層の下に、部分的ではあるが灰黄色の砂質粘土層を確認した。本来はこの面が中世以前の遺構検出面になると考えられるが、当該期の遺構・遺物は検出されなかった。

必要な記録を作成し、本発掘調査は不要と判断し、調査を終了した。



第1848.T-2図 大國魂神社領地古図(元文3年頃) 一部抜粋

※京中市史編纂委員会 1966『京中市史資料集』11より転載・デジタル化



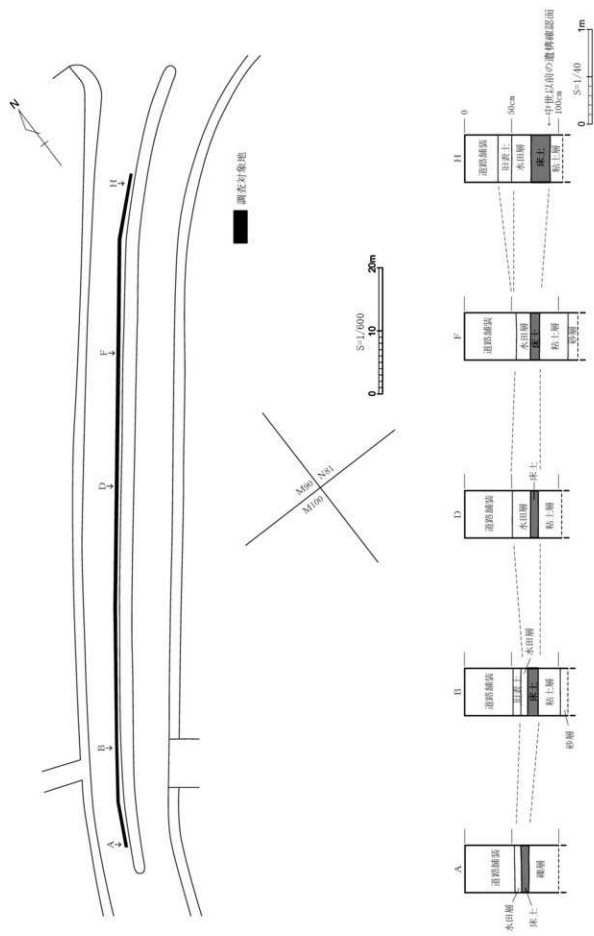
第 1848-T-3 図
土層堆積状況（調査区中央）



第 1848-T-4 図 作業風景



第 1848-T-5 図 作業風景



第 1848. T-6 図 調査区柱状模式図